

鈴木原子力委員会委員長代理の海外出張報告

平成 25 年 2 月 26 日

1. 目的

2013 年 2 月 19～20 日、韓国ソウルにて開催される Asan Nuclear Forum において、「原子力安全と国民の信頼醸成」と「福島事故の課題と機会」のセッションにて、パネリストとして参加するとともに、韓国をはじめとする世界各国からの専門家と意見交換を行う。

2. 日程

- 2 月 18 日（月） 羽田発 → ソウル着
19 日（火）～20 日（水） Asan Nuclear Forum に参加
20 日（水） ソウル発 → 羽田着

3. 報告（概要）

- Asan Nuclear Forum は韓国の民間独立シンクタンク Asan Institute for Policy Studies が主催する国際会議で、世界 23 カ国から約 150 名（韓国からも 150 名以上）の専門家を招待して、原子力、核問題について自由な意見交換を行う国際会議である。日本からは、日本国際問題研究所の遠藤哲也特別研究員をはじめ、数名が参加した。
- 基調講演では、北朝鮮と 93 年の枠組み合意交渉を担当した R. Galucci 大使（マッカーサー財団理事長）が、20 年前と異なり、太陽政策だけでは北朝鮮問題の解決は難しいとの見解を示した。6 カ国協議の枠組みも難しく、むしろ米韓中の 3 カ国で交渉を始めるのがよいとの提言を行った。交渉がうまくいくためには、それぞれの国の国内世論の支援が不可欠であることも強調した。
- 今回は、北朝鮮の核実験直後という事もあり、北朝鮮問題が最初のプレナリーセッションの課題に選ばれた。北朝鮮を除く 5 カ国の専門家（日本からは遠藤氏）が、直近の核実験を踏まえての今後の取り組み方について意見を述べた。北朝鮮の本当の狙いもわからない事や、当面は制裁強化で世界が協力するしかない事など、なかなか決め手になるような妙案が見つからない状況は変わらない。
- パラレルセッションでは、「原子力安全と国民の信頼醸成」のセッションで出張者がパネリストで登壇し、米国バークレー大学の安教授、韓国の元環境大臣等と議論を行った。主なポイントとしては、安全文化の重要性、レジリエンス・エンジニアリングの導入、リスクコミュニケーション・教育の重要性等が強調された。また原子力施設のある地元での信頼醸成が特に重要である点も指摘された。
- この他、出張者が参加した 1 日目のパラレルセッションでは、使用済み燃料・廃

棄物の処理・管理問題、核燃料サイクルの多国間管理が議論された。これらのセッションで共通して議論になったのは、再処理が廃棄物処分にとってメリットがあるかどうかであり、この点では意見が分かれたものの、核不拡散や核セキュリティ上は直接処分にメリットがある点を確認され、核燃料サイクル施設の拡散に対応するなんらかの新たな国際的枠組みが必要であるとの認識が共有された。

- 1日目の最後のプレナリーセッションでは、核セキュリティサミットの成果と課題が取り上げられた。米韓での2回のサミットの成果を振り返り、今年のアムステルダムでのサミットに向けての期待や課題が議論された。注目すべき点としては、サミットの価値は認めたものの、より野心的な成果を望む事の難しさ、今後この動きをどのように継続していくかについて議論が行われた。
- 2日目のパラレルセッションでは、米韓原子力協定がテーマになっており、韓、米の専門家が率直な意見交換を行った。それぞれの主張は並行線であり、交渉が時間切れになる恐れがあることから、「現協定を暫定的に延長する」案が有力であった。その中でも、やはり「再処理」をめぐる是非論が繰り広げられた。
- 続くプレナリーセッション III「エネルギー安全保障か、国家安全保障か」では、原子力利用（特に核燃料サイクル）に関する「奪え得ない権利」（核不拡散条約第4条）と核不拡散の関係について議論が行われた。原子力平和利用の権利と核不拡散を両立させる仕組みとして、「核燃料サイクルの多国間管理」構想、「アジア・太平洋地域原子力共同体構想（G. Evans氏の提案）」等が議論された。ここでも、韓国の「再処理の権利」が議論され、「永久保障措置（permanent safeguards）」概念（核不拡散条約を脱退しても保障措置協定は有効とする）や、「（核燃料サイクル施設の）多国間所有」などが提案された。
- 最後の「福島事故の課題と機会」のセッションでは、韓国 KAIST の Chang Soon Heung 氏（新大統領政権移行チームメンバー）、OECD/NEA の Echaverri 氏、ロシア CENESS の Khlopkov 氏と出張者がパネルに登壇した。3氏とも、福島事故の影響は深刻だが、原子力の重要性には変化がないこと、また中東の原子力プロジェクトについて、より慎重な対応をとることになったことは、かえってプラスであった、などの意見が出た。

（その他）当然のことであるが、北朝鮮の核実験の影響を実感することができた。一方、平和利用の面で、核燃料サイクルへの関心が高まっていることが印象深かった。また、休憩中の意見交換では、主に日本のエネルギー政策の行方、再稼働の時期、プルトニウム在庫量管理と処分、最近の日中、日韓関係などが関心の的であった。